

成長株に企業統々参入

畑や田んぼに縁のなかった企業が統々と農業に参入している。農業は「成長マーケット」との位置づけだ。ビジネススマンが手がける農業とは、どんなカタチなのか。

千葉県山武市



東京・渋谷のITベンチャー社長、都築裕一さん(40)は週に3日、スーツを脱いで野良着姿になる。会社から東に60分、千葉県山武市の農場で無農薬野菜を作るためだ。

会社で借りる合計1畝ほどの畑を1年で3回転させる。栽培するのはニンジンやトマトなど60品目。農場は、日本書紀に出てくる農の神・菊理媛大神にちなんで「くぐりの森」と名付けた。



齊藤完一さんからカボチャづくりの指導を受ける都築裕一さん(左)＝千葉県山武市

20代の専属スタッフ1人がいて、都築さんも一緒に汗を流す。夏には農作業をしながら麦茶を1日5杯飲む。「こんなに汗をかけた経験はなかった」

保育園や託児所など全国4千施設の求人広告を載せるウェブサイトを「キャリアフィールド」を運営する。利用者は最大で月間15万人に上る。もともとは「数字が動く世界」が好き。大学で経済学を学び、証券会社や人材派遣会社に勤

めた。

なぜ野菜作りなのか。

広告の仕事の関係で、千葉県の私立保育園で食育講座を催したときのこと。20代のママが「子どもが生まれてから、食生活がまるで変わった」と話した。平気で口にしていたコンビニ弁当を子どもに与えていいのかと気になるようになり、手作りするようになったという。

都築さんは、ファストフードが好きだった妻(42)が長男出産後に食べなくなったことに思い当たった。「出産や子育てで、親は食材への意識が高くなる。ビジネスチャンスがある」。2010

年、経験ゼロから農業界に入った。

野菜の販売ルートは、運営サイトのつながりで確保できる見通しがあった。だが、肝心の農業のイロハがわからない。先生役を探すうちに、山武市で化学肥料や農業に頼らない野菜作りを30年近く続ける齊藤完一さん(64)と知り合う。齊藤さんは「良い野菜の価値がわかる」と都築さんを気に入る。農地を貸し、植物性堆肥をつくる無農薬栽培のノウハウを伝授してくれている。

都築さんは今年1月、東京・世田谷に直売店を開いた。生野菜のほか、栄養士がつくる野菜ランチも並べる。「金融やネット界で何億円動かすより、300円の野菜が売れると、お金の実感がわく」。次は、離乳食専門のレストランを開く計画だ。

「畑」だ。

生産部長の宮部治泰さん(50)は、自動車やコンピュータの半導体を25年間つくってきた技術者。「品質管理の厳しさは半導体もレタスも同じ」と話す。

ルーム内は、30坪四方に0.5畝メートル(1畝メートルは千分の1)以上のちりがゼロ、という半導体製造時の厳しい室内環境の基準に近づけている。高原のようにひんやりとした室温や、液体肥料のpH値などがコンピュータ管理で常に一定に保たれる。1日3500株収穫し、市内の病院売店や生協などに出荷している。

「メーカーならではの技術がかかっている。勘と経験頼りだった昔の農業とは違う」と、宮部さんは胸を張る。

農業に参入する企業を支援する会社も登場している。

昨年4月に設立された「コネクト・アグリフード・ライন্ズ」(東京・新橋)。農業専門のコンサルティング会社だ。顧客の9割が一般企業や農業法人で、年間売上高は1億円に及ぶ。メーカー向けのセミナーや、農業専門の就活イベントも催している。

熊本伊織社長(35)は、縮んでいるかのように見える農業の統計データをこうとらえる。農業就業人口(13年は239万人)がピーク時より8割減ったのに対し、農業産出額(12年は8.5兆円)の減り具合は3割にとどまる。

「その差50%分の利益をだれかが生んでいる。農業は大きな可能性を秘めた成長産業です」

半導体レベルの品質管理

2009年の農地法改正により、一般企業も、借地であればどこでも農業を始められるようになった。

農林水産省によると、昨年末までの4年間に1400法人が参入した。食品製造・卸売業が目立つ一方、建設、電子部品製造、不動産といった、一見すると縁が遠いようにみえる業界が全体の4割に及んでいるという調査もある。

電機大手の富士通が手がけるのは、「洗わなくても食べられるレタス」だ。福島県会津若松市にある空き工場のクリーンルームが



富士通の「レタス工場」。タブレット端末を操作し、栽培室の照明を切り替える宮部治泰・生産部長(福島県会津若松市)

ご意見や情報をお寄せ下さい
 フォクスは▼03-55565-0837
 メールは▼saiken2@asahi.com